

國分功一郎『スピノザ／読む人の肖像』第4回 レジューメ

2023年9月26日

山野カエル

第四章 人間の本質としての意識

1『エチカ』手稿の発見

2『エチカ』第二部——身体と精神

意識が原因と結果を転倒させている

＞スピノザは目的原因という概念の根幹にある原因と結果の取り違えを説明して、「目的に関するこの説は自然を全く転倒する」と述べている（第一部付録）。意識こそはこの転倒の担い手である。意識は原因の代わりに目的を置き、因果性を目的へと変換し、原因と結果を転倒する。人間は万事を目的のために行っていると信じ、「この結果として、彼らはできあがったものごとについて常に目的原因のみを知ろうとつとめ、これを聞けばそれで満足する」（同）。

（186-187p）

意志ではなく意識が原因と結果を転倒させているという。意識は原因の代わりに目的を置き、因果性を目的へと変換し、原因と結果を転倒する。

意識するということ

＞我々は意識をもつ存在である限りにおいて、意識をもたない存在とは異なる仕方での現実と結びついている。（略）目的は意識を持った存在に、意識をもたない存在ではあり得ない振る舞いを可能にする。意識は意識をもつ存在を積極的に定義するものである。意識は単なる無知ではない。（189p）

我々は意識する。そしてその意識は意識をもつ存在を積極的に定義する。

互いの本質を含む

＞意志の自由を否定した箇所、スピノザは太陽の表象について大変に印象的なことを語っている（第二部定理三五備考）。我々は太陽を見ると、それがすぐ近くにあるかのように表象する。確かに太陽のそのような表象は誤謬と言いうる。だがこの表象は、そのように思わせるほどに強力なエネルギーを発しているという太陽の本質と、それを受け取るとどうしても太陽を近くにあると表象してしまうという人間の本質とを「含んでいる」。単に太陽までの真の距離の認識が欠けているというだけでなく、太陽の本質と人間身体の本質とが混乱して受け止められているところにこの誤謬が存在するのだ。

だから欠損を補うだけでは、つまり太陽までの真の距離を知るだけではこの表象はなくなる。この表象の中にある二つの真なるもの、すなわち太陽の本質と人間身体の本質とを選り分けることが必要である。言い換えれば、第一種認識を抱く精神も、真なるもの、対象のある種の本質を受け取ってはいるのだ。このことは意識が自らに特有の転倒を乗り越える可能性を教えている。すなわち、意識が自らの受け取った結果をその真の原因から捉え直す可能性である。

互いの本質が含まれている。含んでいる。含んでいると意識すること。つまりそれが、意識することが、真の原因を捉えることを可能にさせるということか。

スピノザの真理観

＞第二種認識は真の認識であり、真の認識は、単にそれが真であるだけでなく、真なるものと偽なるものとの区別そのものを精神に教える(第二部定理四二)。なぜならば、精神が真の観念について観念を形成することで、この観念の観念が真であることそのものの規範になるからだ(第二部定理四三備考)。これが第二章で確認した、スピノザの密教的真理観、すなわち真理についての反デカルト的テーゼの基礎となる。「真の観念を有する者は、同時に、自分が真の観念を有することを知り、かつそのことの真理を疑うことができない」(第二部定理四三)。

観念の外側に、それを参照すれば真と判断できるような基準を立てることはできないのだった。真なる観念はそれ自体で精神に、自らが真であることを伝える。観念は「画版の上の画のように無言」でない。真なる観念は自らが真であることを精神に語ってくる。ここから次の実に印象的な一節が語られる。「実に、光が光自身と闇とを顕すように。真理は真理自身と虚偽との規範である[veritas norma sui et falsi est]」(第二部定理四三備考)。これは真理の外的ないしは公共的基準の不可能性という大前提のもとにあるスピノザの真理観を一言で言い表した見事な定式であろう。(194p)

ここは第二種認識「理性 ratio」について述べている箇所だが、第三種認識「直観知 scientia intuitiva」のことを述べているようにも感じられ、そのようにも読めた。

以上